

か、今年はこれを書くことにした。

研究成果としては、以前から続けている“項目反応理論における潜在特性尺度の等化”に関して、名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科（1989, 1990）に発表したもの，“項目反応理論の項目パラメタ推定法”に関して名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科（1992）に発表したものがあるだけである。はなはだ情けない状態である。ただ、現在進行中で私自身が力を入れている研究に“鉄道運転関係職員の適性”に関する心理検査の作成というテーマがある。東日本旅客鉄道会社からの受託研究として実施しているもので、鉄道に関係のある素材を使って項目を作成し、尺度構成に項目反応理論を用い、テストの実施はコンピュータ支援の適応型テスト方式で行なうというもので、研究そのものを楽しんでいる。まだ成果を発表するには至っていないが、今後順次報告するつもりである。自分自身納得がゆき、しかも面白い研究をする機会に恵まれたことを喜び、関係各位に感謝するものである。

研究成果ではないが、項目反応理論の教育・普及にも力を入れてきた。項目反応理論——基礎と応用——（東大出版会、1991）の1章を分担執筆し、さらに、Educational Measurementの第3版の第4章項目反応理論（翻訳では項目応答理論になっている）を担当して翻訳したものが間もなく出版される予定である。教育活動として名古屋大学をはじめ複数の大学院で項目反応理論

をとりあげて講義してある（1992年度）。項目反応理論を広く知ってもらうことが大切と考えているので、研究者としては評価されないかもしれないが、今後とも力を入れてゆくつもりである。

その他に、“外国人のための日本語能力試験”に評価・分析担当の調査員として協力している。これは本教室の村上助教授が精力的に続けて来られた仕事で、それに私が項目反応理論に基づく分析を行なうお手伝いをしているものである。これまで報告書が非公開であるなど、色々な制限があったが今年から公開され、他の研究者からも助言を得られるようになった。やっておきたい分析・やっておいた方がよい分析も多数あるが、現在のところ諸般の事情から実施していない。

というように、あまり大した仕事もしないまま“不惑”の歳を迎えてしまった。さらに間もなく“厄年”である。体力的には大学院時代のような無茶ができなくなつて来つつある。それにひきかえ公私共に雑用の数はかなりのものである。雑用をこなしていると、何となく仕事をしているような気になってしまいうのが恐ろしい。時間のたっぷりあったあの時代にきちんと勉強して来なかつたことが悔やまる。といっても仕方がないので、これからは、相対的に恵まれた研究条件に感謝しつつ、じっくりと納得のゆく研究・勉強を進めて行きたいと考えている。

研究経過報告

池田博和

1990年秋以降、2年間の経過についてまとめておくことにしたい。

1. 登校拒否研究

「登校拒否に関する研究 第IV報 身体性の問題 その2」を平石賢二ほかとの共同執筆で、本学部心理教育相談室紀要「心理臨床」第6巻（1991）に、また、「登校拒否に関する研究 第V報 不登校生徒の合宿体験」を吉井健治との共同執筆で本紀要、第38巻（1991）に載せた。後者の概要是「不登校児童・生徒の合宿体験について 第I報から第VI報」と題して、東海心理学会第40回大会（1991.5）において、北浦茂ほかと共同で発表した。

この合宿経験にもとづいて、本年3月にはあらためて「ヨコ体験合宿」と名づけた不登校生徒のための合宿を

企画、実施した。これはわれわれの登校拒否についての本質把握に直結したグループ・アプローチの試みであるが、合宿後も同じ参加者による定期グループを継続しており、相当のいわゆる「治療」的効果をあげつつある。これを単なる「体験」にとどめず、臨床的本質把握をさらに深め、このような実践を理論的に基礎づけ公共化し得る「経験」へと高めるために今後、一層の検討、考察を加えていきたい。とくにボランティアで参加してもらった若い学生、院生の活躍、感性には目を見張るものがあり、「メンタル・フレンド制」の導入がされたりして、登校拒否問題に対する受け皿の裾野が非常に広がりつつある今日、このような心理学的基礎づけを行っておくことは重要な意味を持つものと思われる。

われわれの登校拒否研究会では、これまでの約10年間

にわたる研究活動を一書にまとめて上梓する計画は前々から立てられていたが、これがようやく実現し、この秋には完全脱稿して、来年早々には福村出版から出されることになった。「青年期登校拒否 ヨコの広がりをめざして」と題する本書は、まさにこれまでの総括であり、「われわれの立場での一貫した主張が盛られているが、これは今日の登校拒否研究の流れに一石を投じうるものであるといういささかの自負を今、われわれは禁じえない」と「まえがき」に記した通りの心境である。

2. そのほかの研究

そのほかとしては、大学ほかの教育現場での精神衛生的ないしは教育論的問題、人間学的接近、ロールシャッハ法、青年期危機論等々が私の主題となっているが、以下、これらにかかる論文、学会発表を年代順にあげておくことにしたい。

1. 大学生の現代的心性に関する研究 第I報から第IV報（単独および桐山雅子ほかと共同発表）日本教育心理学会第32回総会（1990）
2. ロールシャッハ法解説 名古屋大学式技法（村上英治ほかと共編著）名古屋ロールシャッハ研究会（1990）
3. 学校場面における人間関係の研究 自主性・自律性を育てる教育 ある新設中学の挑戦（単著）名古屋大学教育学部文部省特定研究報告書（1990）

4. キャンパスの精神的健康増進に関する研究（単著）名古屋大学教育学部特別研究費報告書（1990）
5. 心理テスト（木村敏ほか編 精神分裂病 基礎と臨床III-4章、朝倉書店、1990）
6. 校則改定に挑んだ子どもたち 自主性・自律性を育てる生徒指導（諏訪耕一と共に編）黎明書房（1991）
7. 重症痩せ症女性との11年余にわたるかかわり 人間学的青年期危機論からの検討（単独）日本心理臨床学会第10回大会（1991）
8. 自己愛人格障害のロールシャッハ反応（堀内和美ほかと共同）日本心理臨床学会第10回大会（1991）
9. ボーダーライン 現代のエスプリ296 至文堂（1992）
10. 人間学的心理療法（田畠治、蔭山英順編 こころの健康を探る 第5章 福村出版、1992）
11. 思春期・青年期の苦悩（田畠治、蔭山英順、小嶋秀夫編 現代人の心の健康 ライフサイクルの視点から 第5章 名古屋大学出版会、1992）
12. 「老い」を考える（同上、第9章）
13. 事典項目「逸話記録法」（現代学校教育大事典、ぎょうせい、印刷中）
14. シンポジウム「心理臨床と宗教性」日本心理臨床学会第11回大会（1992）

研究経過報告

平石 賢二

ここでは1990年11月から現在に至るまでの研究経過について報告することにする。

I. 個人研究

個人研究としては「青年期の自己発達」と「青年期登校拒否」の2つのテーマの研究を行っている。

1. 青年期における自己発達

このテーマについては、平成3年9月に上越教育大学にて「平石賢二 1991 青年期における自己意識の発達に関する研究—自己肯定性次元と自己安定性次元についての検討— 日本教育心理学会第33回総会発表論文集、265-266.」を報告した。また、文章完成法形式の質問文によって測定された「重要な他者からの評価に対する意識」の分析を行い、自己意識との関連を検討している。この文章完成法のデータは分析が難しく、作業がなかなか

か捲らなかったがようやく分析の最終段階に入ったところである。近日中には論文を完成したいと考えている。

また、原岡一馬先生の退官記念出版として、原岡一馬編「人間の社会的形成と変容」が本年度末に刊行される予定であるが、その第5章を担当し「平石賢二 青年期における自己発達と社会的形成」を執筆した。ここでは紙数の関係で十分ではなかったが、今後、個人研究のなかで発展させていきたいと考えている Grotewall, H. D. の理論を紹介した。

2. 青年期登校拒否

青年期登校拒否の問題は、池田博和先生との共同研究も行っているが、個人研究のテーマでもある。私としては、青年期の個体内発達と環境変数との相互作用のなかで登校拒否の分析を行いたいと考えている。

実際の活動としては、名古屋市治療教育相談センター

教育心理学教室教官の研究状況報告

において母子双方に対するカウンセリングを行っている。また、本年度は、名古屋大学ラジオ公開講座を教育学部が担当しており、その活動の一環として「平石賢二 1992 登校拒否—家庭と学校のはざまで—（第4章）田畠治・蔭山英順・小嶋秀夫編 現代人の心の健康 ライフサイクルの視点から 名古屋大学出版会 Pp.62-77.」を分担執筆した。また、近くラジオ放送用の収録を行う予定である。これらの仕事は、依頼のあったものであるが、自分自身の登校拒否研究の視点を整理するために役立っている。

論文としては、名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要第8巻に「思春期登校拒否における発達課題に関する研究」を執筆中である。

II. 共同研究

1. 青年心理学研究

久世敏雄先生との共同研究については、以下の二論文がまとめられた。

「久世敏雄・平石賢二・辻井正次 1991 青年心理研究における現状と課題（Ⅱ）名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 第38巻, 83-135.」

「久世敏雄・平石賢二 青年期の親子関係研究の展望
名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科— 第39巻（印刷中）」

また、今年度よりマツダ財団より研究助成（青少年健全育成関係）を受け、「青年理論の矛盾と解決のためのミニ・モデルの提案—アイデンティティ形成と親子関係の観点から—」のテーマで研究を進めつつある。ここには、新潟青陵女子短期大学大野久先生も参加している。

2. 青少年の成長に関する日本の教育力に関する学際的総合研究

これは、日本生命財団から研究助成を受けている共同研究である。研究代表者は放送大学祖父江孝男先生であり、8つのサブグループから構成され、総勢20数名の大規模なものである。そのうち1つのグループは、アメリカ・発達研究センター、キャサリン・ルイス氏が研究代表者となっており、小学校の授業の日米比較を行っている。また、心理学者だけでなく文化人類学者や教育学者、現場の教員なども含まれ、メンバーの専門性も多岐にわたりており文字どおり学際的な共同研究となっている。

当教育心理学教室からは、梶田正巳先生と速水敏彦先生と私の3人が参加している。

私の担当している研究グループは、「癒す力としての教育力—青少年のメンタルヘルスー」というテーマで研究を進めている。ここでは更に下位の研究グループとして、「教育病理研究会（名古屋市治療教育相談センター・セラピスト桐山雅子先生との共同）」「問題行動研究会（東海女子大学長谷川博一先生との共同）」「アイデンティティ研究会（愛知学泉女子短期大学堀内和美先生との共同）」を持ち、各々独自の研究を行っている。

研究成果は、8月28日・29日（於：弁天島）に全体会が開催され、一部報告された。未だ十分な研究成果が認められていないが、いずれ論文で報告する予定である。

3. 登校拒否に関する研究

池田博和先生との数年にわたる登校拒否研究会の活動である。論文としては、次のものが現れた。

「池田博和・平石賢二・桐山雅子・加藤礼子・吉井健治 1991 登校拒否に関する研究—第IV報・身体性の問題—その2 心理臨床—名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要— 第6巻, 39-47.」

また、2年近く前に計画され、かなり難航していたこれまでの研究成果の集大成が「池田豊應編 青年期登校拒否—ヨコの広がりをめざして— 福村出版」として刊行される予定である。私は、「平石賢二 生活と共に—臨床的家庭教師の取り組み—（第6章）」を執筆した。

III. その他

その他、「平石賢二 1992 乳幼児の理解（第3章第1節、第2節） 西頭三雄児・林陽子編著 保育原理 福村出版 Pp.36-48.」の執筆、「平石賢二 1992 現代青年における自我・自己の特質について—構成概念としての問題 大野久企画ラウンドテーブルB6 現代青年の特質 日本発達心理学会第3回大会発表論文集, 31.」の発表を行った。

また、特定研究「六年制中等学校と青年期教育の改善に関する総合的・多角的調査研究 代表者・鈴木英一教授」の一環として刊行されている中等教育研究第4号に「平石賢二 思春期的移行に伴う発達課題とそれに対する対処様式について」を執筆中である。

(1992年10月8日記)